今日は成一さんの家に遊びに来たけれど……ちょっと離れてる間に、成一さんはスマホを真剣に見てるみたい。
私は成一さんの隣に座って、甘えるように寄り添った。

『なに見てるんですか？』

「あぁ、これ？　キミと一緒に撮った写真を見てたんだ。こうやって思い出が増えていくのは嬉しいなぁ……。ほら、見てよこれ。俺のご飯作ってくれてるとこ」

成一さんは楽しそうに笑ってスマホの画面を見せてくれる。
少し恥ずかしいけど、私のことを考えてくれているのは嬉しい。

『……って、成一さん!?　また盗撮してましたね!?』

私は慌てて成一さんのスマホを取ろうとした。

でも、成一さんに軽く避けられてしまう。

「……おっと。ダメだよ、俺のスマホ取ろうとしたら。削除するつもりだったの？」

『だって……盗撮はダメですよ』

私が消してほしいと表情に出すと、成一さんは少し悲しそうな顔をする。

あの日から盗撮はしないでください、って言ったのに……。

「なんで？　こんなに可愛いのに……。キミの一瞬一瞬を大事にしたいんだよ」

『そ、そんな優しい顔してもダメですっ』

消してください、と何回か訴えるが全く聞く耳を持ってくれない。

成一さんに、もう！と少し怒った顔をすれば可愛いと言われるだけだった。

「ほら、せっかくだから一緒に見よう？　これ一緒に遊園地に行ったときの写真だよ」
『〜〜っ、もう……』
差し出されたスマホを覗けば、二人で一緒に笑いあっている写真が目に映る。
成一さんとのデートは、いつも楽しくて時間を忘れるほどだった。
「あ、これは水族館に行ったときだね？　ふふ、キミがご飯食べてるとこも撮ってあるよ」
『私の写真ばっかりじゃないですか……って、これ……』
「ん？　あぁ、これはキミの寝顔があまりにも可愛すぎて……つい、ね？」
『寝顔だけじゃないですよね……着替えに……それにこれ、動画ですか？』
成一さんの写真フォルダを確認すれば、私のあらゆる姿が撮られていた。
いつの写真⁉というものもあれば、最近の写真までびっしり私の顔が

写っている。
フォルダには写真だけじゃなくて、動画もあって……。

「この動画？　気になる？　これね……キミがオナニーしてる動画だよ。俺と付き合ってるのに、まだオナニーなんてしてるんだね。これ、悲しかったなぁ……」

『そ、それは……違うんです……えっと……』

成一さんと付き合ってからは、自慰行為はしていなかったけど……。
成一さんが忙しくて会えない日が続いて、寂しくなって、一回だけしてしまった。
私が返事に戸惑っていると、成一さんはじりじりと詰め寄ってくる。

「どうして俯いてるの？　別にオナニーしてもいいんだよ。少し悲しくなっちゃっただけ。俺がいるのになぁって……。……だから、俺のお願い聞いてくれる？」

『え……は、はい……』

しまった。成一さんからのお願いに頷いてしまった。

これは、とんでもないことをお願いされてしまうのではないか……と、安易に返事をしたことを少し後悔した。

そんなことを悶々と考えているすきに、成一さんの手が私に触れる。そのまま、成一さんにお姫様抱っこされてしまう。

あっという間に、私はベッドに押し倒された。……成一さんの心臓の音が聞こえそうになるくらい距離が近い。いつ見ても成一さんはかっこいい。

「あのね、キミの写真や動画はたくさんあるんだけど……まだハメ撮りはしてなかったよね？」

『は、ハメ撮り!?　だ、ダメです！』

「え？　ダメなの？　……そっかぁ。……キミが一人でオナニーしてるの悲しかったのにな……。どうしても、ダメ？」

成一さんのあり得ない提案に驚いて拒否をするが、悲しそうな顔をされると完全に拒否できるわけもなく……。

私って、成一さんの悲しい顔に弱すぎるなぁ。

『……うっ……うう……撮ったらすぐ消してください……』

「ふふ、分かった。撮ったらすぐ消すね。キミの顔が見えるように設置しておかないと」

成一さんはそう言うと、ベッド脇にスマホスタンドを固定して、スマホを設置する。

いったいどこからこんなものを……さっきまで見当たらなかった気がするのに……？

疑問が残りつつも、深くは聞かないことにした。ピコンと音が鳴ったので録画が開始されたんだろう。

「カメラ気になるの？　気にしなくて大丈夫。

俺の顔、ずっと見てて……ほら、キスしよう？　んっ……」
『んぅ……成一さん……』

成一さんのキスは、とっても甘くて溶けてしまいそうな感覚に陥る。

「かわいいね……キスしただけなのに、もう気持ちよくなっちゃってるの？　はぁ……んっ……。ちゅっ……んっ、じゅるっ……ちゅぅ……。あー……可愛い……俺にしか見せない顔、すっごい可愛い。俺のキスでトロトロに溶けてる表情して……気持ちいいんだね」
『んっ、あっ……成一さんっ……』

成一さんの吐息が近くて、心臓がドキドキする。
私だけじゃなくて、成一さんもドキドキしてくれているといいな。

「……うん。俺の名前、何度でも呼んで……。それで、好きっていっぱい言ってっ……」

『成一さんっ、すきです……すき……すきっ……』

何度も好きと伝えると成一さんは嬉しそうに微笑むので、私も微笑み返す。

私の服を優しく脱がす成一さんに従っていると、いつの間にかすべての服を脱がされていた。

「……本当きれいな身体……。今から、俺に愛される準備ができてるみたい……いっぱい愛してあげるからね」

『……っ、恥ずかしいから言わないでほしいです……』

「……ふふ、いつも言ってるのに、まだ恥ずかしいの？　そういう初々しいところも可愛い……はぁ、本当に可愛いよ……可愛すぎてどうにかしちゃいたくなる……」

成一さんはいつも私のことを可愛いと言ってくれるけど、まだ慣れなくて照れてしまう。

私が変顔をしたとしても、成一さんはきっと可愛いと言ってくれるのだ

ろう。

「ちゅっ、はぁ……ちゅ……んっ……、はぁ……。最初は、乳首をかわいがってあげないとね……。じっくり舐めてあげるから……」

『んっ……』

成一さんの舌が私の胸や乳首を執拗に舐めまわしてくる。温かくて、気持ちのいい舌に声が出てしまう。

「……気持ちよさそうに喘いじゃって……前より、乳首弱くなっちゃった？あぁ、違うか。俺がキミを変えちゃったんだよね。ふふ、嬉しい……。ちゅっ、ちゅっ……んっ、はぁ……。……美味しい。キミの乳首ってなんでこんなに甘くて……可愛くて……美味しいんだろうねっ……。ずーっと舐めてられるっ……」

最初は少し余裕があった成一さんだったが、だんだんと余裕がなくなっ

てきたのか……私の身体を少し性急に何度も愛撫する。しばらく愛撫すると、私の顔に近づいてきて優しくキスをしてくる。

「ちゅ……ちゅっ、んっ……ねぇ、俺、キミと付き合えて嬉しいんだよ。でも……まだ全然足りないんだ。キミのこと画面越しでも感じていたいから……いつも撮っちゃう……。はは、キミに片思いしてた期間が長かったから、抑えきれなくなっちゃったのかもね？」

『……っ、いつから……？』

疑問に思ったことを口に出すと、成一さんは私とのキスをやめて、じぃっと目を見つめてくる。

「いつから……そういえば、言ってなかったっけ。改まって言うのは恥ずかしいんだけど……図書館で一緒に勉強したの覚えてる？」

『えっと……した、かも……？』

「ふふ、忘れてるんだよね？　俺が二年生で、君は一年生で……入学した

ばっかりのキミは、初々しかったなぁ……。初めてのレポートで書き方が分からないって頭抱えてて……。困ってる人を放っておけないから、俺から声かけたのがきっかけかな」

成一さんの言葉で、一気に記憶が思い起こされる。

『あっ！　お、思い出しました……その、レポートのお手伝いしてくれましたよね……？』

「そうだよ。俺から手伝おうかって声かけたら、泣きそうな顔して『お願いします』って、俺の手握ってきて……はぁ……今も可愛いけど、あのときのキミも可愛かったなぁ……」

成一さんは恍惚の表情を浮かべる。

「でも、俺が言うまで気づいてなかったってことは、キミはあんまり覚えてなかったんだろうね。たまたま隣にいただけの先輩に声をかけられただ

け……って感じだったと思うから」

切なそうな顔をする成一さんに胸が痛む。覚えていなかったというより、もう関わることがないと思っていたから……深く考えないようにしていただけ。

『忘れてたわけじゃなくて……その……えぇと……もう関わることがないと思ってたので……』

「……俺はあの日からキミのこと忘れられなかったよ。俺のことを『高御堂成一』だから特別扱いをするんじゃなくて、ただの、一人の先輩として接してくれるキミに興味を持ったんだ。他の人は、なぜか俺のことを特別扱いしてくるから」

成一さんは私の頬を愛おしそうに撫でる。

その行為に少しだけくすぐったくなりながら、私からも成一さんの手に頬をすり寄せる。

「キミのこと……ずっと目で追ってたんだよ。最初はただキミのことが知りたくて、ひっそりと後をつけて……家を知ってから、何度も通ったなぁ。それに、キミってよく家の鍵をかけ忘れてることあるよね。おっちょこちょいなのも可愛いけど、気をつけないと変な男に狙われちゃうでしょ」

……成一さんが私の家に侵入するのはいいんだ……と、冷静に考えてしまった。

そのあとも成一さんは言葉を続ける。

「それに、俺もずっとキミのそばにいられるようにしたいけど……これから就活で忙しくなるから、すぐに会いに行けないかもしれないんだ。だからせめて、鍵はちゃんと掛けておくんだよ？」

『……わかりました。気をつけます。……それと、あの、すぐに成一さんのこと気づけなくてすみません……』

「ん？　いいんだよ。気づかなくてあたりまえだし。本当は、俺から話し

かけたかったんだけど……忘れられてると思ったら、話しかけるのが怖かったんだ。……でも、あの日、キミに学生証を拾ってもらってから……理性が飛んじゃって、キミのこと持ち帰って抱いちゃった。……こんな俺を許してくれてありがとうね？　んっ……」

『……んっ、あっ、ふぅっ……』

成一さんは私に深いキスをしてくる。それを受け入れるので精一杯で返事ができない。

「……片想いしてた分、キミのことといっぱい愛してあげるからね……。はぁ……ここ、もう濡れてる……。……挿れてもいい？」

成一さんは私の秘部を指で触ってくる。水音がして、濡れているのが自分でも分かり、顔に熱がこもる。

両手で顔を隠して、照れている姿を見せないようにする。

『……はい……』

「恥ずかしがってるの……？　かわいい……乱れた姿も全部大好きだから平気だよ……？　もっと、もっと俺に可愛い姿みせて……。はぁ……欲しい欲しいっておねだりしてるキミのまんこに、俺のちんこ挿れてあげるからね……」

私の秘部から指を抜いて、ゆっくりと成一さんは性器を押し当ててくる。ずぷずぷと入っていく成一さんのソレを感じながら受け入れる。

『んっ、んんっ……』

「はぁ……ゆっくり挿れたけど、どう……？　痛くない……？　キミのナカ、いつも気持ちいいね……それに、俺のちんこの形になってきてるのも、すっごい嬉しい……」

いつも私の身体を気遣ってくれながら、動いてくれる成一さん。それに愛おしさを感じる。

「それじゃあ、動くからね……？」
『ん、はいっ……あっ、んぅっ……』
「ほら……んっ……気持ちいい……？　その可愛い顔、しっかりカメラに映ってるよっ……。もっと喘いでいいからねっ……」
『やっ、はぁ、あっ……』

成一さんの言葉に抵抗する気もなくなるくらい気持ちがいい。おかしくなっちゃいそうだった。成一さんの顔を見ると、成一さんも余裕がなさそう。

「キミのナカ、本当に気持ちよすぎて……俺、すぐイきそうっ……。はぁっ……あぁ、イっても続ければいいのか……んっ……いっぱい気持ちよくなって……はっ……」

必死になっている成一さんを見て……私で感じてくれてる成一さんを見て……嬉しくなってしまい、私はビクッと絶頂してしまう。

「……んっ……はぁ、ねぇ、キミのナカ、キュウって締まったけど……イっちゃった？　まったく……感じやすいところはずっと変わらないねっ……はぁ……俺のちんこ、離したくないって……」

私が絶頂したのに成一さんは動きをやめない。私のことを気持ちよくさせようと、ゆっくり何度も奥を突いてくる。

「ねぇ、イったあとに突かれるのってどんな気分なのっ……？　気持ちよすぎておかしくなっちゃいそうっ……？　んっ……おかしくなっても大丈夫だからね。キミの奥までじっくり犯して、何も考えられなくしてあげるからっ……。それに、キミのかわいい顔、俺にしか見せてないよね……？他の人に見せてたら、嫉妬でおかしくなっちゃいそうなんだっ……」

時折見せる成一さんの嫉妬心が嬉しく思ってしまう私は、すでに成一さんに溺れているのだろう。もっと、もっと、その姿を見せてほしい。

『あっ……誰にも、見せてないですっ……』
「……そっか。よかった……俺しか知らないんだねっ……ふふ。こんなに乱れてるキミも、俺しか知らないんだ……はぁ……嬉しいな……。何度も何度も、キミのこと愛してるけど、いつも愛したりないよ……」
『私もっ、成一さんのこと、愛してますっ……』

私の言葉に微笑む成一さんは、先ほどとは違う深いところを何度も突いてくる。この感じは、成一さんもイきそうになっているのだと気づく。

『あっ、成一さんっ……ゴムつけてなっ……』
「んっ……はぁ……ふふ、今さらゴムつけるの？　なんで？　俺と結婚するのに……ゴム必要？　俺のちんこ、こんなに締めつけてるくせにっ……。ねぇ……ほらっ……たくさん、感じてっ……孕ませてあげるからっ……。ちゅっ……キミと俺の子ども、絶対可愛いよっ……キミに似るといいなぁ……んっ……」

『あっ……まって、成一さんっ……だめっ……』

未来のことを話されて嬉しく感じつつも、大学生でまだ結婚は早いのではないのかと感情がごちゃごちゃになる。それよりも、また絶頂しそうな感覚が襲ってくる。

「もうっ、イきそうっ……キミのナカにたくさん注いでっ……イくねっ？はぁっ……んっ、キスしながらっ、一緒にイこうっ……イ、くっ……イクッ……！」

『あっ、あっ……！　……イクッ……！』

私と成一さんは一緒に果てる。ぐったりする私の髪を撫でながら、耳元まで近づいて囁かれる。

「……ごめん……キミが可愛すぎて……全然萎えない……。もう少しだけ付き合ってくれる……？」

『えっ……む、無理です……』
「お願い……キミも気持ちいいでしょっ……？　イったあとに、突かれるの好きなの知ってるよ……ナカがキュウキュウ締めつけてきてさっ……はぁっ……んっ……」

絶頂したのにも関わらず、違う激しい動きに声が抑えられなくなる。気持ちいいところをたくさんたくさん突かれて、成一さんでいっぱいになる。

「俺のこと、好きだって……愛してるって言ってっ……ん、んっ……キミに言われるだけで、幸せになれるからっ……」
『あっ……好きですっ……成一さんっ、大好きですっ……愛してますっ……』
「ぁっ……はぁ……嬉しい。俺も大好きだよ、愛してるっ……。何回イっても、全然萎える気がしないっ……でもっ、あんまりエッチしすぎると……キミの身体がつらくなっちゃうもんねっ……」
『あっ、あっ……はぁっ……』
「もう少しでイくからっ……はぁ、可愛い……キミのこの顔、ずっと残る

んだよね……あ、そうだ。キミの最後にイく顔は、俺視点で撮らないとねっ……」

そういうと成一さんはスマホを片手に持って、私のほうにカメラを向けてくる。恥ずかしい姿を撮られていて、途端に羞恥心が襲う。

『えっ、せ、成一さんっ、や、やだっ……』

「……っ……はぁっ……大丈夫、スマホからはちゃんと消しておくからっ……。あっ……くっ……もう、イくっ……！　キミの子宮が俺の精子でたぷたぷになるくらい注いであげるからっ……！　はぁっ……愛してるよっ……。イく、イくよっ……キミのナカにっ、またっ、大量に精子だすよっ……！　イク……はっ……っ……　うっ……イクっ……イクっ……！」

激しい動きで奥を何度も突かれ、私は身体をのけ反らせて絶頂する。成一さんの精子が子宮に注がれているのが分かる。ドクドク脈打ってて……成一さんを近くで感じてる。

「はぁ……はぁ……身体、つらかった……？　ごめんね……？　でも、ほら……いい動画とれたから、あとで一緒に見ようね？」
『はぁ、はぁ……消すって……？』
「うん、スマホからは消すってことね？　他のところには残しておくよ……こんなに可愛いのに、消すのもったいないでしょ」

最初と言ってることが違う成一さんに戸惑うが、そんなことは気にしてないようで……スマホを私の恥部に向ける。

「……キミのまんこから……俺の精子、たくさん溢れてる……。エロいね……ちゃんと撮っておかないと……ふふ……」
『っ……成一さんっ……それ、嫌ですっ……』
「うん、キミは嫌だよね。ごめんね。でも、俺にとっては大事だから……ね？　許してほしいな……」
『……っ……こ、今回だけですよっ……』

いつもそう。成一さんの意外と甘え上手なところに、私は拒否することができない。私も成一さんに絆されているのだと気づくのには、時間がかからなかった。

「……ふふ、ありがとう。やっぱりキミは優しい……」

触れるだけの優しいキスをして、成一さんはスマホの録画を停止する。スマホをベッドの端に置いて、私の身体をきつく抱きしめた。

「ああ、そうだ。そろそろ俺の家族に会わせたいんだけど、どうかな？キミのご家族にも挨拶に行かないとね」

『えっ、ま、まだ大丈夫ですよっ……』

「まだ大丈夫……？　だって、キミのナカに、大量に俺の精子注いでるんだよ……？　俺との子どもできるまで、そう時間かからないと思うなぁ……」

『それは……』

確かに成一さんの言う通りだった。最初から成一さんは私と結婚する気満々だったから、避妊具をつけたことはなかった。私のお腹に成一さんとの子どもができるのは、そう時間はかからないだろう。でも嫌ではなかった。

「だから今のうちに、挨拶をすませておかないとね。将来のことで不安になってるなら大丈夫だよ。キミのことも、俺たちの子どもも、ちゃんと養うから……」

『……わかりました。私も成一さんのご家族に挨拶したいです』

「ふふ、ありがとう。……あぁ、はやく結婚したいね……愛してるよ……」

ぎゅうっと音がするほど、息苦しくなるほど、きつく離さないと、身体で表現されているようだった。

私と成一さんが結婚するまで、あと――。

Fin